『松浦宮物語』に現われる「孝」について

朴　南　圭

はじめに

津田左右吉氏が、『文学に現はれたる我が国民思想の研究』[1]において儒教思想は、学問として書物を通じて知識人の間で学ばれたのみで、現実生活ではあらわれていないと指摘したように、従来、平安朝物語に儒教の影響はほとんど認めることができないとされてきた。

しかし、近年になって平安朝物語における儒教の影響が論じられるようになった。『源氏物語』中には、「孝」という語が七例、「孝養」という語が一例みえるが、田中徳定氏によれば、「孝」の三例が生前の親に仕えて大切にする意味、四例が死後の親に供養をする意味で用いられている、という。また、「須磨」巻以降、光源氏・朱雀院・冷泉院の孝が物語の展開と密接な関わりを持ち、孝の倫理が大きく物語の表面に出てきている」と、『源氏物語』における「孝」の役割の大きさを論じている[2]。

また、儒教の根本思想である「孝」の視点から、『うつほ物語』『落窪物語』『源氏物語』など平安時代物語を再評価する試みがなされるようになった。田中氏は、『源氏物語』に描かれている不孝の罪意識に、儒教がすでに仏教と融合していたこと、「三従」のように生活思想に密着していたことから儒教の影響を指摘している[3]。つまり単独の儒教思想を、平安朝物語の中から抽出することは困難であるが、仏教と融合した形、道徳や倫理としての儒教、宗教性までもみることができる。

本考では、「孝」という観点で『松浦宮物語』の主人公と母宮の関係から、物語における孝のあらわれかた、孝が物語にどのようにかかわっているかを考えてみる。

一『松浦宮物語』と佐用姫説話

『松浦宮物語』の内容と題号とのかかわりについては、三角洋一氏が、主筋の三つの恋の物語とほとんどかかわりない母宮（の住居）が、題号にあらわれるのも変であるが『御津

の浜松』の場合と同様に、主人公との別れを悲しみ帰国を心待ちした女性のいることを暗示して、『御津の浜松』の面影をかすめた題号にしたと見るならば、適当な命名である、としている。[4]

「松浦宮」はまた、その宮に住んで、わが子の帰国を待つ母宮自身でもある。本文における「松浦の宮」は、母宮飛鳥の皇女が、子の弁少将が遣唐副使となって出国するのに先立って、松浦の山に宮を造った、その建造物を指す。

さらに、

「帰りたまはむまでは、そなたの空を見む。若き老いたるとなき浮かべる身の、遠き舟路にさへ漕ぎ離れ給はむに、波風の心も知らず、たれもむなしくあひ見ぬ身とならば、やがてその浦に身をとどめて、天つ領巾振りけん例ともなりなん」と出で立ちたまへば、

(5)(二五頁)

とあるように、母宮は自らを「松浦佐用姫」に準えている。それゆえ、母宮の行動から「松浦」に宮を造るという背景と、母宮が自身を準えた「松浦佐用姫」の伝説について考えることにする。

肥前の国の「松浦」は、地理的に大陸に近く、大陸交通の玄関口であり、遣唐使の時代を想起させる地名である。物語の冒頭で、「むかし、藤原の宮の御時」(十五頁)と時代を設定していることを考えれば、時代も場所もまさに遣唐使のイメージである。

物語の内容は、遣唐副使として渡唐する主人公弁少将の唐での遍歴を中心に描くことになる。いうまでもなく「松浦」は、主人公たちが唐へと出国する場所となっていたわけである。

萩谷朴氏は、「母皇女が弁少将の帰国を待つことからこの題名が生じたのであるが、このことは作品全体の構想にはさして重要性を持たない」[6]としている。果たしてそうであろうか。

物語の終わりに、主人公の帰国の際に、母宮との松浦での再会やその後の日本での栄華を予期させる結末までを描いていることから、物語の構成の最初と最後の部分は「松浦」というイメージを背景にしているのであって、題名の持つ意味が物語の冒頭部分のみに終わるわけではない。

先に引用した母宮の発言のなかに「天つ領巾振りけんためし」とあることは、松浦佐用姫の伝説をふまえたものであり、[7]母宮が松浦佐用姫のように「待つ」人となって、子の無事帰国を祈るということである。

松浦佐用姫伝説とは、『日本書紀』宣化二年条、欽明二十三年条をはじめ、『肥前国風土記』『万葉集』『古事記』に載るところで、『和歌童蒙抄』『袖中抄』など歌学書を経由して説話

集にまで引用され、『万葉集』に由来する伝説の中でもっとも流布したといわれている。『万葉集』巻五（八七一）の詞書には、

大伴佐提比古郎子、ひとり朝命を被り、使を藩国に奉はる。艤棹してここに帰き、やくやくに蒼波に赴く。妾松浦佐用姫、かく別れの易きことを嗟き、かく会ひの難きことを歎く。すなはち高き山の嶺に登り、離り去く船を遙望し、悵然肝を断ち、黯然魂を銷つ。つひに領巾を脱きて麾る。傍の者涕を流さずといふことなし。よりてこの山を号けて、領巾麾の嶺といふ　(8)

と、大伴佐提比古が藩国へ出征し、残された松浦佐用姫の悲しみを描いており、この伝説は悲恋譚として流布し、『万葉集』以後、和歌に詠まれるようになった。母宮は、このような伝説を背景として、松浦の地に宮を造り、悲恋の主人公佐用姫のように子の帰国を待つというのである。

ここで注目したいのは、伝説においては佐用姫は再会のために「待つ」ことと、招魂のために領巾を振る、という二つのことである。というのはこれらにおいては松浦佐用姫が再会を果たしたかどうか結末は書かれてないことが注意され、類話の多くもそうである。(9) 母宮の場合も同じく、帰ってこいという招魂儀礼にもとづいて松浦に赴いたのであり、母宮は、もし子が帰って来なかったら当地に留まり、領巾を振り招魂しつづけるつもりであったと考えられるからである。

古代の航海技術から、遣唐使が帰国しない例もあった。だから母宮は、自分自身の悲しみを佐用姫の悲しい心境にたとえるとともに、現実的に宮を造って、不幸の場合は当地にて命が尽きるまで待つという覚悟をしているとみることができる。

弁少将は無事帰国し、松浦で再会するが、母宮はそれまで松浦の地の宮で子の帰りをひたすら待ち続けていた。

母宮は、物語の出発点において主人公を送り出す役割を持つのみならず、子の帰国までを見守る存在として位置づけられており、このような母親の存在によって弁少将は帰国を果たしたといっても過言ではない。

このように死をも覚悟して子の帰りを待つ母親の造形は、別れに際して紅の涙を流した『うつほ物語』俊蔭巻の俊蔭の母を、なおいっそう強調したかたちとみることができる。

二　帰国の運命の子

では、弁少将は唐においてどのような心境にあっただろうか。物語の順を追ってみていくことにする。

唐に着いた弁少将は唐帝から、

あらぬ国の人として、あひ見る日数少なけれど、汝はかならずひとたびは国を平らぐべき相あり。我この病つひに怠らずは、世乱れなんとす。汝かならず太子に従ひて、恐れ逃るる心なかれ。命あやぶみなくして、かならず本の国に帰るべし。思ふゆゑありて、このことをもらしつ。

(10)(四十八頁)

と反乱の平定と東宮を託され、帰国を保証される。これに対して、弁少将は、武器を扱う術も知らないと申し上げるが甲斐もなく、ついに御門は崩御される。

御門が崩御されると、予言通り反乱が起きる。しかし、弁少将は日本の住吉明神の助力によって見事に反乱を平定するのである。反乱が収まり東宮が即位すると、残るのは帰国問題のみとなった。弁少将はひたすら帰国を願うのであるが、先例によって、遣唐使として派遣された者は三年以上唐に滞在しなければならないと定められていること、唐で官位をさずけられた者が帰朝する例がないことなどを理由に、臣下から反対の声があがる。この部分については、反対者の挙げた二つの根拠が史実にあわないとの指摘があり(11)、そうだとすれば、なぜこのような意見を盛り込む必要があったのか。この意見は後の、「誹謗の木」の条によっても繰り返されることになる。「(帰国を許すことを)いま行なはるるがごとくは、ひとへに朝の疵とあるべし」(九九頁)とある。

また、本の国に帰ることは、我が勧むるところにあらず。鬼神の守り導く、ゆゑ異なる人なれば、その志を破らば、いよいよ恩を忘るべし。我、もとより嘆きいためど、またとどめむ謀なし。重ねて謀り定めよ」

(一〇〇〜一〇一頁)

少将の帰国の願いに対して　后は、「これはなにの例にも知らず、ただ思はん志を違へじ」(七九頁)と語って帰国を許すのである。后は、「かならず本国に帰る願い深くして、これを妨げば、恩を知る本意に背くべし」(七九頁)と、別れを惜しみ引きとどめたい気持ちを言う。

少将は、「ふたりの親の思ひまどひし志、またあひ見ずは、後の罪さりどころなく見たまへし時は、かたじけなき御あはれびありて、返し遣はされば、その命尽きぬ先にあひ見んばかりや、古郷に向かふ喜びにはべるべきと思うたまへしゆゑひとつにこそはべれ」(八二頁)と、帰国を望んだ唯一の理由が両親の生前に再会するためだと言う。続いて「まして同じ世の生をかへずは、おのづから頼みもはべるべし。君に仕うまつる道、疾くも遅くも、わたくしの心に思ひ願ふべきことに

もはべらず」（八二頁）といい、また、母后の不思議な魅力に心を引かれ、少将は思い乱れてしまう。

帰国の準備を待っている少将は、母后へのひそかな想いと帰国を願う気持ちとで複雑な心境になる。

「春を過ぐしてと聞きし日数も、むげに残りなくなりぬるこそ、またいつと聞かむ月日をだに、しか慣らひては、いかばかり待ち遠におぼゆべきを、かくて止みなむこそ言ふかひなけれ」（九五～九六頁）

少将は人の思っていることを理解しているが恋の苦悶でどうしようもないでいる。

「やうやう夏のうちに船出すべきよし聞こゆるを、うれしと急がるべき道なれど、いまはまた、ほのかに見えし影のみ忘られず、悲しくて、いかなりし契りのはかなさとだに、またあきらめぬ夢ながらや漕ぎ離れなむと思ふに、ひきかへし、あらぬ涙ぞ色変りぬべき。とどめし袖の移り香につけては、枕定めむかたもなく、いかに寝し夜の悲しさの、身をせむる心地すれば、」（一〇二頁）

少将の複雑な心境を反映しているかのように、帰国の日程は順調に進まず、冬から春夏を経て秋へと延期されてしまう。この延期の決定で少将の心が少し安静を得たという表現をみることができる。そこには、少将が帰国よりは唐にとどまりたいという気持ちが現れているといえよう。彼は母后に心ひかれ父母の待つ日本への帰国をためらっているのである。

同じ世の頼みをだに思ひ絶えなん道は、さしも急がれし古里も、いまさらにたゆたふ心のみまされば、「風など常に静まらず、波の上もいかが」など聞くにことよせて、秋を待つべきに定まりぬれば、いくばくのほどならねど、少し心静かに思ひなれど」

（一〇七頁～一〇八頁）

また、後に展開される、しょうの女との逢瀬でも、弁は帰国か滞在かを思い悩むのである。

しかし、少将はやはり戻っていくのである。その背景は何であろうか。

三　不孝の子俊蔭

『松浦宮物語』の主人公の人物造形が『うつほ物語』俊蔭巻に影響されていることについてはすでに指摘がある。[12]

清原俊蔭は、父母の待望の子として生まれる。容貌や学問

などあらゆる方面に優れ、父母はその将来を期待するが、十六歳のとき、朝命により遣唐使となった。父母は悲しみ血の涙を流すが、朝命であり、どうすることもできない。益田勝実氏は、俊蔭誕生の時、親はすでに四十歳前後であろうと推定し、神意の子としての人物造形であるとする。(13)

以下しばらく、俊蔭の漂流譚における「孝」を語る場面を拾い上げ、「孝」のあらわれ方をみていくことにする。

俊蔭は遣唐使として出航するが、嵐に遭い遭難してしまう。漂着した波斯国で琴の音に誘われ、行った山で阿修羅に出会う。阿修羅は、

「ここに来たことは許せないことであるが、日本の国に、「にんにくのちちははがある」と言ったことによって許す。速やかに帰って、自分のために大般若経を供養せよ」(十二頁)

という。これに対して、俊蔭は、

「父母の慈悲深かったが国王の命によって父母を離れた。出国の時に「なんぢ、不孝の子ならば、おやにながきなげきをあらせよ。孝の子ならば、あさきおもひのあさきにあひむかへ」(十二頁)といわれたのにこのように長く留まっている。自分は不孝の子である。せめて琴を聞かせて父母の命を延ばしてあげたい」と願う。

俊蔭はこのように、それまでに語ることのなかった「孝」を阿修羅に向かって説いている。阿修羅も自分の子を思い、俊蔭を許すことになる。その後、天女、天人、仏に会うなどの遍歴を経て、波斯国の国王に帰国を願い出るところで、「日本に歳八十歳なる父母侍りしを、見捨ててまかり渡りにき。(中略)白きかばねをだに見給へむ」とてなむ急ぎまかるべき」(一九頁)といい、帰国を許される。

ようやく二十三年ぶり、三十九歳になって帰国する。すでに父親は亡くなって三年、母親が亡くなって五年になった年である。俊蔭は嘆いたが甲斐もなく「三年のけう」(一九頁)を行った。これで不孝の子俊蔭と親との話は終わるわけである。「忌服令」によれば、父母の忌は十三ヶ月となっているので、ここでの三年は、『論語』などの「三年之喪」(二十五ヶ月)のように儒教の儀礼である。三年の喪に服すのは、自分の不孝によって父母と生きて再会することができなかったことによるのであろう。

俊蔭は、国王の命令という不可抗力による不孝を後悔し、帰国して後に、朝廷の意向に従わず官位を辞退している。これについても同じようなことがいえよう。

以上を要約すると、俊蔭は恐ろしい阿修羅に対して孝心を説き、孝の実現のために帰国を願う。阿修羅と天女、仏まで

が子を思う気持ちがあり、俊蔭の孝に共感している。しかし、国王の命令による出国で生前に父母に再び会うことは叶わなかった。生前に孝行できなかったことを悔やんで三年の喪に服する、ということになる。孝をめぐる思念がいかに大きかったかは歴然としている。

4 『松浦宮物語』の孝

孝について加地伸行氏がまとめているところをみると、

祖先は過去であり、子孫は未来である。その過去と未来とをつなぐ中間に現在があり、現在は現実の親子になって表される。親は将来の祖先であり、子は将来の子孫の出発点である。だから子の親に対する関係は、子孫の祖先に対する関係である。そこで儒教は、一、祖先祭祀をすること、二、現実の家庭において子が親を愛し、かつ敬うこと。すなわち敬愛すること、三、子孫一族が続くこと、この三者を併せて「孝」と表現したのである。(15)

とある。すなわち儒教の「孝」は、現実における敬愛、死後の祖先祭祀、子孫の繁栄の三つからなり、特に、子孫を持つことは重要な意味を持つ、ということになる。

儒教は、古代中国人の死生観に基づく宗教性と、その宗教性を基盤とした実生活における道徳性の二面性を有しており、宗教としての儒教は、招魂再生による祖先祭祀を基底としている。このような儒教の思想は、平安時代の物語における登場人物や物語の展開における準拠として深い影響を及ぼした。

『松浦宮物語』の孝は、『うつほ物語』の親と生前に再会できずに無念な思いをした主人公像から抜け出るべく位置づけられている。また、母宮が自らを佐用姫に準えて、わざわざ松浦に宮を造り「領巾振りけんためし」を演じるのは、その場所が再会の地であるからである。

『うつほ』で「孝の子」として出生した俊蔭が、父母と再会できなかったことは不孝であるが、彼は後に「三年のけう」をしている。対して『松浦宮』では、弁少将は母宮と再会するのみならず「家」の存続という、もっとも重要な「孝」を実践している。

俊蔭と同じく、弁少将も、ただひとり申し子のような存在として出生していた。容貌・才能どれをとってもすぐれ、将来を期待される存在であった。朝命によって遣唐使に任命され、父母と別れたが、一方は父母が子の帰国を待たずに亡くなり、もう一方は父母と再会をはたした。

松浦の地に起因する伝説は、『万葉集』の話においては、遠征に伴う男女間の別離が主なテーマであり、別離の悲しみと貞女というイメージを提供した。しかし、サヨヒメの伝説を

ふまえる『松浦宮』にあっては、題名の由来を考える上で、「待ち人」が母親であることが疑問であった。そこで、親子の情愛、孝、孝養という視点で、『うつほ』、『松浦宮』をみると、『うつほ』における不孝（帰国時にはすでに親が亡くなっている）を現世における「孝」に変化したかたちとして位置づけられたと思われる。弁少将は、帰国か滞在かに想い悩みながら結局は帰っていかざるを得なかった。

申し子として、優れた人物として試練を乗り越え、繁栄をもたらす存在として、また、親への孝養というテーマを、松浦にまつわる従来のイメージと重ね合わせれば、物語の題名が持つ物語全体への意味がみえてくるのである。

註

（1）津田左右吉『文学に現はれたる我が国民思想の研究』岩波書店、一九七八年。

（2）田中徳定「平安朝物語における儒教――「孝」と「三従」を中心として」『駒沢国文』、第三十八号、二〇〇一年二月。

（3）田中徳定、前掲論文。

（4）三角洋一「『松浦宮物語』の意図をめぐって」『物語の変貌』若草書房、一九九六年年所収。五六頁～五七頁。初出、『高知大学学術研究報告』第二十四巻一号、一九七五年九月。

（5）『松浦宮物語』の引用は、『松浦宮物語・無名草子』新編日本古典文学全集、小学館、一九九九年により、本文中に頁数を示す。

（6）萩谷朴『松浦宮全注釈』若草書房、一九九七年。二七六頁。

（7）『領巾を振るということについては、古代では人が呼吸をしなくなると、魂が肉体から飛び出て昇天すると考えた。それゆえ中国の古代では、屋根にのぼって死人の着ていた衣物を振って、帰って来いと呼んだのであった、という儀式に通じる行為である。

（8）中西進『万葉集』（講談社文庫、一九九六年）の訓読による。

（9）『日本書紀』における弟姫の例も同じく再会の結末は書かれない。

（10）引用は、室城秀之著『うつほ物語』全　改訂版、おうふう、平成十三年十月による。

（11）萩谷朴、前掲書。本文。

（12）江戸英雄「恩愛と異郷――うつほ物語の主題――」『国文学研究資料館紀要』第二十三号、一九九七年三月。

（13）益田勝実「物語の成長期」『日本文学研究資料叢書　平安朝物語Ⅱ』（有精堂、一九七四年）初出、『日本文学』第十六巻六、八、十号、未来社、一九六六年六、八、十月。

（14）定家と母の現実においても母子の関係をみることができる。『松浦宮物語』の作者である藤原定家は、父俊成と美福門院加賀のあいだのおおぜいの子のなかでもとりわけ愛情を受けた。そのことは、『藤原隆信朝臣集』に、

少将さだいへ、このははのおぼえなりけるを、かの少将こと

わりもすぎて思ひかなしみて、わが身ひとつのことになむ侍りけるとて、いたうなげきしづみて、ひとつうちなれど、ふみにかきつづけていひかはしたるをみるにつけても、いとどかなしさまさりて、

とあるように、建久四年二月十三日の母の死に対して、定家の悲しみは深かった。定家は母の死に際して、

かなしさはひとかたならず今ぞしるとにもかくにもさだめなき世を（二四一四）

たまゆらの露もなみだもとどまらずなき人こふるやどの秋風（二四一七）

『拾遺愚草　下』（新編国歌大観）

と詠んでおり、その母は多くの子女のなかでもとりわけ定家を大事にしたらしく、定家の中将昇進に対して、

みかさ山みちふみそめし月かげにいまぞこころのやみははれぬる（一一五九）

定家、少将になり侍りて、月あかき夜、よろこび申侍るを見侍りて、あしたにつかはしける。

『新勅撰集』雑二　新編国歌大観、角川書店

と喜んでいる場面をみてもよくわかる。

(15) 加地伸行『沈黙の宗教――儒教』（筑摩書房、一九九五年）六十頁～六十一頁。